

『北野天神縁起』の詞書の一考察

——慈田との関わりを巡って——

丹羽 博之

菅原道真は承和十二（八四五）年に是善の子として生まれた。菅原氏は清公以来歴代の侍読を勤めた家柄である。道真も儒者として詩人として、父祖に恥じない才能を発揮した。宇多帝の抜擢もあって、順調に官位も昇進し右大臣にまで昇った。これは父祖にもない異例の栄達であった。ところが、讒言により急転直下、太宰府に左遷され、失意の日々を送り、望郷の念を抱きつつ、延喜三（九〇三）年任地で五十九歳の生涯を閉じる。

彼の死後、京では凶事が打ち続く。延喜九（九〇九）年、道真左遷の中心人物である左大臣藤原時平が三十九歳で没した。延長元（九二二）年には、時平の妹穂子が生んだ皇太子保明親王がわずか二十一歳で没する。世間では「菅帥の靈魂宿念」と噂した。延長三年には保明親王の子の慶頼王が五歳で没する。さらに延長八年六月二十日には、旱天のための請雨の会議中にわかに雷鳴し、清涼殿西南の第一柱に落雷。大納言藤原清貫ら四人の廷臣が焼死するという天災も起こる。同年九月醍醐帝は退位し、同二十九日に崩御。このほかに『日本紀略』『扶桑略記』などによると、道真没後、旱魃、洪水、疫病などの災厄が相次いで起こった事が記されている。こうした凶事の原因は菅原道真公の怨霊によるものという考えが広まった。その怨霊を鎮めるために、道真を本官右大臣に復し、正二位を追贈、北野神社に祀るなどの名誉回復が行われた。

怨霊信仰、御霊信仰の流れの中から天神信仰が生まれ、徐々に広がって行った。その流れの中で、鎌倉時代に『北野天神縁起』は成立した。本稿では『北野天神縁起』の中の道真が漢詩を一時に十首速詠した逸話の詞書の特徴を中心に考察を進める。

一、漢詩一時百首の逸話

『菅家文章』（巻五）三九一には次の詩序がある（本文は古典大系本による）。

七年暮春二十六日、予侍東宮、有令曰、聞大唐有一日應百首之詩。今試汝以一時應十首之作。即賜十事題目、限七言絕句。予採筆成之、二刻成畢。雖云凡鄙、不能燒却。故存之。

（七年暮春二十六日、予東宮に侍りしとき、令有りて曰く、聞くならく、大唐に一日百首に應ふるの詩有りと。今試みに汝一時を以て十首の作に應へよと。即ち十事の題目を賜りて、七言絶句を限りたまふ。予筆を採りて成すこと、二刻にして成し畢はんぬ。凡鄙なりと云ふとも、焼却すること能はず。故に存すといふ。）

この詩の序について、川口久雄氏『菅家文章 菅家後集』の補注には、

一日百首応令詩が、唐に行われたことは、李嶠の百廿詠などで類推できるが、その作品は未詳。羅紉に比紅児詩七絶は百首があり、和擬に宮詞七絶百首などあるが、これらが一日になったということはしるされていない。むしろ李嶠の百廿詠は五律であるが毎詩、題を換えたところの詠物詩である点で、道真の十首詩・二十首詩と体式において似ている。十首詩は、皮日休と陸龜蒙の漁具十五詠、樵人十詠、酒中十詠、茶具十詠などの酬和の連作群をはじめ、呉融の即席十韻や徐鉉の柳枝詞十首の応制詩など似ているといえよう。二十首詩は、劉禹錫の深春二十首七絶、元稹の生春二十首五律などの例がある。

詠物の点では、唐太宗・李嶠・董思恭・徐鉉等の詠物題と似ており、ことに李嶠の百廿詠の題とかさなりあうものが多いから、必ずや道真の作にはこれらの投影があろう。（以下略）

川口氏が未詳とされた中国での一日百首の例は、晩唐の孫発の逸話であることが最近わか（注1）つた。

寛平七年暮春に三九一の詩序以下十首の速詠が作られた年の初夏、道真は更に二十首を速詠している。四〇一詩の序には

東宮寓直之次、下令曰、去春十首、既知敏捷。今取當時二十物重要。某不停滯即來令之後、不敢固辭。自酉二刻及戌二刻、篇數僅成。慎令旨也。經數十日、要寫一通、近習少年、斷失三首。初不立案、無處尋覓。一十七首、備于實録云介

(東宮寓直の次で、令を下して曰はく、去る春の十首、既に敏捷なることを知る。今當時の二十物を取り、重ねて要むと。某停滞せずして即ち來令の後、敢へて固辭せず。酉の二刻より戌の二刻に及ぶまで、篇數僅かに成れり。令旨を慎めば也。数十日を経て、一通を写さむことを要むるに、近習の少年、三首を斷ち失へり。初めより案を立てず、尋ね覓めむに処無し。一十七首、實録に備ふと云ふこと介り

とある。川口久雄氏は、寛平七年のおそらく初夏四、五月のころであろうとされる(大系本)。詩序には重ねての速詠の令に答え得た誇りとその内の三首を紛失したことを惜しむ口吻が感じられる。一時十首では二刻とだけであったが、今度は「酉の二刻(午後六時半)より戌の二刻(午後八時半)に及ぶまで」と、詠まれた正確な時刻まで記されている。但し、先の「一時」のような制限時間は記されていない。「風中琴」「竹」「薔薇」等と初夏を思わせる詩題で詠まれている。

前掲『菅家文章』三九一番詩の大系本補注には、『太平記』(卷十二・大内造営並びに聖廟の御事)に見える道真の速詠の逸話が挙げられている。『太平記』の記述は『北野天神縁起』と関係が深い。次に『北野天神縁起』(承久本)の速詠の逸話の箇所を挙げる。

同七年三月廿二日、延喜のみかど春宮にておはしましけるに令旨をくだされき。我聞大唐國に一日百首の詩を作たる人あり。汝才智ならびなく七歩があとをたづねたり。誠に一時のうちに十首の詩を作てんやとて即十事の題目を給て酉の刻よりいぬの時にぞ作てたてまつりたまひける。

送春不用動舟車 唯別殘鶯与落花

『北野天神縁起』の詞書の一考察——慈円との関わりを巡って——

若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家

さてつぎのとしかさねて令旨をうけたまはりて二時のうちに廿首の詩作てまいらせ給ければ昔も今もかゝる不思議なしとぞの、しりあひたまひける。

『菅家文章』(三九一)の序に比して、曹植の「七步之才」の逸話が付け加えられ、「汝才智ならびなく」「昔も今もかゝる不思議なしとぞの、しりあひたまひける」と道真を持ち上げる筆遣いになっている。『北野天神縁起』の性格としては当然の文飾であろう。本来『菅家文章』の四〇一番の詩序にあった製作時刻が三九一番詩に移動している。「酉、戌」の時刻は正確であるが、より細かな二刻の表記は略されている。『菅家文章』(三九一)では、「一時十首」の条件であったが、実際には二刻(半時)で詠み終えているが、『北野天神縁起』は最初の条件、一時(酉よりいぬ)で十首を詠んだことになっている。さらに『北野天神縁起』は四〇一番の詩の時刻表記と三九一番詩の速詠の制限時間を組み合わせている。

四〇一番の詩は三九一番の詩と同年の作であろうと考えられるが(大系本注)、『北野天神縁起』では「つぎのとし」となっている。また日付が三月廿二日になっているのは単純な誤写であろう。また、二時の間ふたときに二十首という記述は『菅家文章』には無かったが付け加えられている。

速詠十首の第一首目の「送春」の七絶は四句とも全て『和漢朗詠集』(巻上・春・三月尽)に採られるほどの名詩であるが、『北野天神縁起』がこの詩のみ挙げるのも道真の詩才を手短に示す意図からであろうか。なお、この「送春」の詩は白楽天の詩「春末夏初、閑遊江郭二首(其二)」(0935)を利用して(注と)いる可能性がある。

次に、『太平記』(巻十二・大内造宮並びに聖廟の御事)の道真の逸話を挙げる。

同じき年の三月二十六日に、延喜帝いまだ東宮にて御座ありけるが、菅丞相を召されて、「漢朝の李嶠は、一夜に百首の詩を作りけると見えたり。丞相何ぞその才にしかざらんや。一時に十首の詩を作りて、天覧に備ふべし」と仰せ下されければ、すなはち十首の題を

賜りて、半時の内に、十首の詩をぞ作らせ玉ひける。その詩に云はく、

春を送るに舟車を動かすことを用ひず（送春不用動舟車）

唯だ殘鶯と落花とに別る（唯別殘鶯与落花）

もし韶光をして我意を知らしめば（若使韶光知我意）

今宵の旅宿は詩家に在らん（今宵旅宿在詩家）

といふ暮春の詩も、その十首の絶句の内なるべし。

（新編日本古典文学全集）

『菅家文章』『北野天神縁起』と相違するのは「漢朝の李嶠は、一夜に百首の詩を作りけると見えたり。」と百首の詩人が漢朝の李嶠に比べていることと一日百首が一夜百首になっていることである。中世に流行した和歌の「一夜百首」の影響によって、道真の速詠の逸話も「一日百首」から「一夜百首」に変えられたのであろう。また、日本にも流伝していた「李嶠百詠」と結び付いて「漢朝の李嶠は、一夜に百首の詩」になったのであろう。共に中世の『太平記』の享受者に合うような改変と言えよう。

『北野天神縁起』とでは、「酉の刻より……」の時刻が示されず、七歩の才の逸話も無く、四〇一番詩以下の後日談も無い。『菅家文章』では一時を限って詠むという条件にもかかわらず、一刻のうちに来た事を誇らしげに書き留めている。『北野天神縁起』では酉の刻より戌の時とあり、約一時で成ったと四〇一番詩の詩序に合わせて改編されている。『太平記』では半時とあり、『菅家文章』の二刻を言い換えている。そのかわり、一首目の「送春」の詩に読み下し文が加えられており、語り物としての『太平記』の特徴を示している。しかし、「丞相何ぞその才にしかざらんや」と道真を称揚する点は同じである。また、一時に十首とあったのが半時に短縮され、より難度の高い速詠であったことを吹聴している。『菅家文章』では誇らしげな筆致ではあるが、当然ながら自らを称賛してはいない。『北野天神縁起』『太平記』では道真の文才を称える筆遣いになっており、その作品の目的に合った文飾がなされている。道真自身も誇りに思ったようであるが、彼の詩才を示す格好の材料として、速詠の逸話は後世の人々に受け入れられた。『北野天神縁起』『太平記』に採られた逸話は、それぞれの

『北野天神縁起』の詞書の一考察——慈円との関わりを巡って——

作品の性格、時代の好尚によって多少の文飾を加えられ、受け継がれていった。

以上三作品の逸話の異同を表にすると次のようになる。

『菅家文章』	『北野天神縁起』	『太平記』
暮春廿六日	同七年三月廿二日	同年三月二十六日
大唐一日百首	大唐一日百首	漢朝李嶠一夜に百首の詩
一時十首	一時のうちに十首	一時のうちに十首
二刻で速詠	酉の刻よりいぬのとき	半時に十首速詠
	七歩が跡	
自酉二刻及戌二刻	酉の刻よりいぬのとき	時刻なし
(四〇一番の序)	さらに二時に二十首の詩	二時に二十首の詩の記事なし

二、『北野天神縁起』の詞書と慈円

『菅家文章』『北野天神縁起』『太平記』の道真の速詠の逸話を調べて行くうちに、和歌の速詠の名手、慈円と『北野天神縁起』の關係に気づいた。

すでに『北野天神縁起』の詞書の筆致が慈円の影響下にあるとする源豊宗氏の説がある。

「北野天神縁起絵巻について」(『新修日本絵巻物全集』角川書店・一九七七年)において、源豊宗氏は両者の關係について次のような結

論を下されている。

愚管抄と北野縁起とは、一は一種の史観をもつて記述した歴史でむしろ実用的なものであるのに対し、他は神社の縁起として一種の文芸的修飾が要求されている点に、両者の性格に著しい相違があるにもかかわらず、その文体においても、記事内容についても、到底別人の手に成つたとは考えられない程類似しているのである。(同書 二 北野天神縁起)

また、『愚管抄』と『北野天神縁起』との類似する箇所を具体的に挙げて、

愚管抄と北野縁起との間に、記載の内容に同じ語句、同じ思考方式が随所に発見される。これらは単なる偶然の一致という如き関係ではない。北野天神縁起のあの独自の風格は慈円の筆になったところから来ているのである。(同書 二 北野天神縁起)と結論づけられた。

『日本古典文学大辞典』の「北野天神縁起」の項にも「『愚管抄』との類似や、九条家擁護の記事によって、天台座主慈円を作者に擬する説もある。」とある。

次に、慈円の速詠の才と道真の速詠の逸話との類似点を検討する。「拾玉集」には一日百首の和歌が詠まれている。

隆寛阿闍梨一日百首よみたるとて見せしかば、やがてよまむと思ひて、文治六年四月八日午四点末のはじめばかりに筆をとりてやがて書付けし程に、さるのをはりとりのはじめの程に百首かきはてたりし、只二時の程にや、題十首なり、(以下略)

「拾玉集」卷五(新編『国歌大観』)

と隆寛に刺激されて一日に百首を詠んでいる。道真の一時十首は暮春の作であり、再び四〇一番詩以下の速詠がなされたのは初夏四、五月のころであり(川口氏注)、詠まれた季節も一致する。また「自西二刻云々」と「午四点末のはじめ云々」と細かな創作時間帯を記すという態度も類似する。

隆寛が一日百首を思いついたのは、『菅家文章』の逸話に刺激を受けたからかも知れない。隆寛から一日百首の話聞いたときに、慈円の脳裏には『菅家文章』の逸話も思い出された可能性がある。慈円は『北野天神縁起』の詞書創作にあたって、以前から一日百首の和歌を

詠んでいた親近感から『菅家文草』の一日百首の逸話を漏らす事なく『北野天神縁起』に収録したとも考えられる。

後に慈円は一時百首を作っているが、一時いつとき（今の二時間）に百首の速詠は道真の「汝以一時応十首之作」と時間の制約条件は同じである。漢詩では十首、和歌では百首というのは、和歌と漢詩の創作に要する時間の相違によるものであろう。慈円が一時いつときに百首を速詠しようと思った背景に道真の逸話があったのではないか。それは『北野天神縁起』の詞書の筆致が慈円の影響下にあるとする源豊宗氏の説とも符合する。

この他、『北野天神縁起』は、慈円及び天台僧の手になるといふ、鎌田東二氏の説もある（「天神と日輪」『天神伝説』太陽スペシヤル八七年一〇月）。また、慈円の手に成る『愚管抄』には天神信仰が認められる。

「汝才智ならびなく七歩があとをたづねたり」と『北野天神縁起』は『菅家文草』には無い曹植の故事を入れて道真を称揚しているが、慈円の「拾玉集」にも「七歩の才」を詠んだ歌がある。文治六（一一九〇）年四月八日に慈円は一日百首を詠んだあと、その成立事情を漢文の跋に手短に記した後、次の歌を添えている。

からくにななあゆみせしたぐひとやみとぎにたらでちらすことのは（「拾玉集」巻一・一〇〇三）

一日百首の速詠に関して共に七歩の才を持ち出している。曹植の故事は人口に膾炙しており、慈円ならずとも用いるであろう。しかし、他の情況証拠と併せ考えた場合、そこに慈円と『北野天神縁起』とを結ぶ細い糸の様なものを感じる。

文治六年は建久に改元されるが、『北野天神縁起』の根幹本文とされる「承久本」の巻末の奥書は「建久五（一一九四）年十月廿四日書了」とあり、慈円の一日百首の時期と極めて近い。一時百首も建久元年に詠まれる。隆寛が一日百首を語ったのに加えて、道真の一時十首の速詠及び大唐一日百首の逸話も知っていた上で、慈円の一日百首は詠まれたのではないか。さらに発展して、道真の一時十首の応用として慈円の一時百首がその年の内に詠まれたと推察される。速詠を得意とした慈円が道真の速詠に共感を覚えたであろう事は想像に難くない。そうした性格の慈円から考えて、もし『北野天神縁起』の草稿なりでも考えたとしたら、一時十詠の逸話は必ずや採り入れたであろう。

また、慈円は承久元（一二一九）年に「北野社法楽和歌」を奉納しているが、これも彼の道真敬慕の表れと見ることができよう。先にも触れたが源豊宗氏は『北野天神縁起』と慈円の関係を考証された。今回の考察で源豊宗氏の考証に加えて、両者には更に次の類似点が挙げられる。

- ① 慈円は一日百首、一時百首など速詠の才にあふれ、速詠に関心を抱いていた。また、道真の速詠の逸話の季節と慈円の一日百首の詠まれた季節はほぼ一致する。また、詠まれた時刻表記が類似し、創作時間を正確に記そうとする態度が一致する。
- ② 慈円の一時百首は時間の制約でも『菅家文章』の一時十首と一致する。
- ③ 七歩の才の逸話が両者に共通して利用されている。
- ④ 慈円の一日百首、一時百首速詠の時期と『北野天神縁起』の根幹本とされる承久本の成立の時期が近い。

これらの類似点は情況証拠でしかなく、決定的なものではない。時刻表記の類似は『拾遺愚草』にも見られ、慈円が『菅家文章』を参考にした確実な証拠にはならない。また、七歩の才の逸話の利用も慈円に限らず、広く巷間で語られていただろう。しかし、先学の論に加えて今回考察した数多くの類似点は、慈円と『北野天神縁起』の関係を暗示しているように思う。

道真自身も誇りに思ったようであるが、速詠の逸話は彼の詩才を示す格好の材料として、後世の人々に受け入れられた。『北野天神縁起』『太平記』に採られた逸話は、それぞれの作品の性格、時代の好尚によって多少の文飾を加えられ、受け継がれていった。

『北野天神縁起』の詞書の一考察——慈円との関わりを巡って——

注

- 注1 拙稿『菅家文章』（巻五・三九一）の漢詩一日百首の逸話を巡って、『菅原道真論集』勉誠出版 ○三年三月刊行予定）。
- 注2 注1に同じ。

後記

『菅家文章』に見える「大唐一日百首」の逸話は、『全唐詩』所収の方干、皮日休の詩集や『中呉紀聞』などから、晩唐の詩人孫発にまつわる話であることが判明した。孫発の逸話と『菅家文章』の速詠の逸話については別稿（注1）で論じた。

また、白楽天は百首の詩によって己が文才を示し、世に出ようとしたことがある。白楽天や孫発の百首の詩に想を得て、平安中期の異色の歌人曾禰好忠は百首歌を創始したのではないかと考察した（『好忠百首』と『漢詩百首』、『古代中世和歌文学の研究』和泉書院 ○三年二月）。

『菅家文章』の速詠の逸話を唐詩に例を求め、その副産物として本稿に述べたような慈円と『北野天神縁起』の関係にも言及することができた。